

## ▶ エスペラントと親近感あるアナーキズム

エスペラントは、世界共通語を使い、国家を超え民族を超えて人々と繋がろう、という考えが根底にありますから、おのずと国家を否定するアナーキズムに親近感があるはずで、しかしだからと言ってエスペランティストが即、アナキストというわけではありませんし、またアナキストがすべからずエスペラントを学ぶということもありません。

仔細にエスペラント界を眺めて見れば、大勢は政治に対しては中立的な立場、いや、現実の政治に対して積極的に関わろうとする人がとりわけ多いともいえないでしょう。

しかし今回登場する山鹿泰治は、エスペランティストにしてアナキスト、その関係は不即不離、エスペラントとアナーキズムがいわば一心同体のように自己の中に体現されていた稀有な存在かもしれません。

## ▶ 印刷工として生きる

山鹿は1892(明治25)年、父・善兵衛、母・京の子供として、京都三条烏丸に生まれました。13人兄妹の第12子でした。父は京呉服の行商で長崎へ行き、長崎奉行所の通訳でオランダ学者・本木昌造と出会い、西洋染織の知識を得ると共に弟子となり、活版術を伝授されました。そして本木は善兵衛に、京都で印刷所を開かせました。

しかし京都は首都を東京に譲り、新しい印刷術のような商売は東京や大阪と違って繁盛するとはいかなかったのです。家業が苦しい時代、山鹿はインクつけや紙取りなど小僧のような仕事をやらされました。

このような環境を嫌った山鹿は15歳の時、知人の中村弥二郎を頼って東京に出ました。そして弥二郎が社長をしている有楽社に住込み小僧とし

て入りました。東京銀座の隣、有楽町にあった出版社が有楽社です。社長が中村弥二郎、弟の竹四郎も勤めていました。支配人が安孫子貞次郎です。

この安孫子が熱心なエスペランティストであり、社長の中村弥二郎もその賛同者であり、日本最初のエス日辞典やガントレットの『エスペラント読本』『月刊ヤパーナ』『エスペラント』などを刊行し、また前年にできた日本エスペラント協会(略称JEA)の事務所が有楽社の中に置かれていたのです。山鹿も有楽社の社員有志が集まってできたエスペラント講習会に誘われて参加するようになりました。

## ▶ エスペラントにのめり込む

講師は黒板勝美、東大史料編纂課に勤める文学博士であり、初期日本エスペラント運動の指導者でした。30人ほど参加した講習会は3回ほど続いたところで、続々と脱落者が増え、とうとう山鹿一人が残り、いつしか講習会も中断しました。

しかし山鹿は中学時代、英語の試験の際、白紙答案を出して零点だったことがあったようで、それもあってか、「よし、石にかじりついてもエスペラントだけではモノしようと思った」(晩年に回想した「たそがれ日記」)ようです。そして有楽社から出ていたザメンホフの『練習題集』と二葉亭四迷が出した『世界語』を独習するのでした。

またその頃山鹿は、銀座でキリスト教の一派、救世軍の銀座小隊で洗礼を受けてキリストの兵士になっていました。山鹿は毎晩仕事を終わると、銀座四丁目の銀座本営に出かけ「迷える魂を救うためにサタンと闘った」と書いています。また日記には、こうも書かれています。

「非合法に遊郭から脱出してくる女の解放のために、救世軍が石を投げられたりなぐられたりし

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」

第十九回 放浪のアナキスト 山鹿泰治 I

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

ながら働くとき、私の正義感は大いに満足した。しかし、ブース大將にひきいられた救世軍は、軍隊組織そのまま命令絶対服従の専制で、私の良心をしばしば悩ました。またエスペランティストとして、イギリス一辺倒のあり方は不愉快きわまるものであった」と回想しています。

### ➤ キリスト者からアナーキストへ

有楽社に一人の熟練した印刷工が入ってきて山鹿の隣の席に座りました。原田新太郎と名乗る、おとなしそうな青年は山鹿の赤い救世軍帽子を見て、「キリスト教では、天皇や政府をどう考えるか」と聞いてきました。山鹿は即座に「聖書に、汝ら王の権威に従うべし、そはすべての権威は神より出しものなれば、とある」と返答しました。これはいつもやっている救世軍の伝道方法でした。

原田はそれに対して「神は人間を創ったというのに、その人間がなぜ喰ってゆけないのか、神は公平だというのに、なぜ金持ちと貧乏人、病人と健康者の不平等があるのか」など、次々に山鹿を問い詰めました。そして「もともとキリストは歴史上非実在の人物で、作り話にすぎない」と言うと、山鹿は答えることができませんでした。

原田はアナーキズムの信奉者でした。そして山鹿に、「これは国禁の書だ」と言って極秘で貸してくれたのが幸徳秋水訳の『パンの略取』(平民社刊)でした。山鹿はそれをむさぼるように読み、社会を見る目がまったく変わってしまいました。キリスト教徒からアナーキストへの思想的な転換でした。

### ➤ アナの巨人、大杉栄に会う

原田が熱心にアナーキズムを勧めるので、ある日エスペラント語でアナーキストの大物である大杉栄に手紙を出したところ、大杉からすぐに「次の日曜、三越の待合室で待つ」という返事がエス文で来ました。

その日、山鹿は原田と一緒に三越で大杉を待っていると、縞の背広にパイプをくわえ、特徴ある大きな目玉をぎょろつかせて大杉がやってきまし

た。当時、大杉は危険人物として官憲の尾行がついていましたが、尾行をまいて、人が多い三越を選んでやってきたのです。

山鹿は、自分がエスペランティストで印刷工だと自己紹介をしましたところ、大杉は大仰に、「西洋でも印刷工が革命の先頭に立っている。エスペラントは世界の労働者が団結するための最も有力な武器だ」と山鹿を大いに励ましたのです。

尾行する男が大杉にまかれてしまうとその日の日当が出ないので可哀そうだと、大杉は彼のいそうなところを探しながら日比谷公園まで歩き、ベンチに座り込み、暗くなるまで山鹿たちと話して別れました。この半日の大杉との対話は、山鹿の生涯を決定するものとなりました。その夜、山鹿は寝床の中で、自分がこれから歩もうとしている道を考えて興奮して眠ることができませんでした。

### ➤ キリスト教と訣別

山鹿は翌日、救世軍の集まりに出かけ、「今日から私はキリストと訣別する。そして無政府主義者の後を追って働こうと覚悟を決めた」と宣言したのです。とは言うものの、「神を捨て切れず苦しんでいる。しかしアナーキストの中に、神を信じる人はひとりもいないと聞いて悩んでいる」と翌月、大杉と並ぶアナーキズムの巨人、石川三四郎に会い、石川から彼の神観を聞き、ようやく神が宇宙天地の支配者で最高の権威だという迷信から目覚める糸口をつかんだのでした。石川の神観とはどのようなものだったのか、残念ながら山鹿の回想からは見つかりません。山鹿は後年、もうほとんど忘れてしまったと回想していますが、エスペランティスト山鹿がアナーキズム運動へ大きく転進する契機になったのです。この時代は、1911(明治44)年、大逆事件直後の共産主義者やアナーキストたちへの厳しい監視と弾圧があった暗黒時代ともいうべき時代でした。山鹿の決意は並々ならぬものだったと言えるでしょう。